

2017年度(平成29年度)学校評価自己評価表

城北中学校区	校番 56	福山市立久松台小学校
最終更新日		2018年(平成30年)2月26日

I 福山市

ミッション	福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビジョン	「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

II 中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容 学校関係者評価報告書は全項目「十分満足できる」と評価された。しかし、目標が達成できていないものもある。校内研修での指導法の工夫改善、各学年での取組の工夫改善を図り、取組の進捗状況を細かく把握し課題克服に向けてPDCAサイクルに則り実践する。	児童生徒の現状 広島県「基礎・基本」定着状況調査の結果、城北中学校区は、概ね県平均を上回っている。また、校区共通で取り組んだことで、「家庭学習の定着」や「あいさつ」、「地域行事参加」などの意欲は向上してきているが、自分から進んで行うことにはまだ課題がある。	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”) めざす子ども像 (義務教育修了時の姿) 中学校区として統一した取組等	思考力・判断力・表現力、主体的に学ぶ力、他者とかわる力、社会貢献力、自己形成力 じっくり考え、はっきり表現し、くり返し粘り強く挑戦する児童・生徒 (J) (H) (K) ・基本的生活習慣や家庭学習の目安を示した校区スタンダードの取組 ・毎月15日にあいさつデーとして校区合同挨拶運動の取組 ・中学校のテスト期間に合わせて家庭学習頑張り週間とノーメディアデーの取組 ・合同行事・乗り入れ授業・「総合的な学習の時間」発表会の取組
---	---	---	--

III 自校

ミッション 未来を切り拓く「生きる力」を育成する 「すべては子どもたちのために」を基底に据え、学校・保護者・地域が連携し、「この学校へ来てよかった」「この学校へ来させてよかった」といわれる学校に	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”) めざす子ども像	主体的に学ぶ力 ・わくわく感を持って授業にのぞんでいる。 ・予習を行い、何を学ぶのかが分かって授業にのぞんでいる。 ・予習を行い、自分の考えを持って授業にのぞんでいる。	表現力 ・既習内容や経験を活用しながら自分の考えを伝えることができる。 ・自分と友達の考えを比較し、共通点や相違点を見つけることを通して根拠を明確にしながら自分の考えを伝え、考えを広げたり、深めたり示し、よりよい考えを生み出すことができる。	他者とつながる力 ・反応しながら聞くことができる。 ・友達の考えを大切に受け止めることができる。 ・友達の意図を汲んで自分の考えを伝える。	社会や自然と関わろうとする ・身近な社会や自然に親しみ、やさしい心で接する。 ・身近な社会や自然に親しみ、自分との繋がりを大切にすること。 ・身近な社会や自然に進んで関わり、自分とのつながりを大切にする。
学校教育目標 自ら考え 正しく判断し 行動する 感性豊かな子	現状 <児童生徒> 【成果】 ・全国学習状況調査・広島県「基礎・基本」定着状況調査では国語・算数ともに全国平均を上回り、基礎的・基本的な学力は定着している。 【課題】 ・広島県「基礎・基本」定着状況調査の理科では県平均を下回った。 ・他者と関わり合いながら、自分の考えを深めることには課題がある。 <授業> 【成果】 ・授業の中で自分の考えを書く時間を設定した結果、87%の児童が「根拠を1つ以上あげて説明する」ことができるようになっている。 【課題】 ・予習として系統的な宿題を出すことにより、次の学習への意欲付けを図ったり、生活や体験から理科的現象に目を向け理科への興味関心を高めたりする必要がある。	研究 教科等 理科・家庭科(生活科) 主題・内容等 根拠を明確に表現し、学び合う子どもの育成 ～学ぶ必然性のある授業の工夫を通して～	めざす授業の姿 【主体的な学びのある授業】 ・予習をすることで、授業に対する関心や意欲を持つ。【甲】 ・授業の中で自分の考えを書く活動を通して、根拠を明確にする。【乙】 ・ペア・グループ学習で、友達の気持ちを受け止めて聞き、自分の考えを広げたり深めたりする。【他】 ・社会や自然に関する内容を調べたり、動植物を育てたり、衣食住等について考えたりすることを通して、自然を大切にする取組を考える。【社】		

IV 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立久松台小学校

年目	中期経営目標	重点	分類	短期経営目標	目標達成に向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)			最終評価(2月末)					
							□指標に係る取組状況	70%以上達成評価	改善方策	□指標に係る取組状況 ◎短期(中期)経営目標の達成状況	70%以上達成評価	総合評価	改善方策		
2	自ら考え学ぶ児童の育成と基礎学力の定着	★	継続	基礎学力が定着している児童	予習を含めた家庭学習を行い、基礎学力を定着させる。	全国学力・学習状況調査・「基礎・基本」定着状況調査・標準学力調査のA・B問題とも全国平均以上とする。単元テストを全国平均以上にする。	全国学力・学習状況調査、「基礎・基本」定着状況調査とともに、全国・県平均を上回った。単元テストでは、国語科の平均点が92点、算数科の平均点が87点だった。両教科とも全国平均を上回っている。	3	4	全国学力・学習状況調査、「基礎・基本」定着状況調査とともに「読む力」「書く力」に課題が見られたため、「音読指導」「ノート指導」を実施し、それぞれの力を高める。	□単元テストでは、国語科平均点が89点、算数科平均点が88点だった。両教科とも、全国平均を上回っている。 ◎基礎学力は概ね定着している。「読む力」「書く力」は、力が伸びつつあるが、継続した指導が必要である。	4	4	4	「音読指導」「ノート指導」に継続して取り組み、力をつけていく。
				主体的に授業に取り組む児童生徒	思考を問う授業の中で、自分の考えを書く時間を設ける。	「根拠を1つ以上挙げて説明できた」児童を90%以上にする。	「根拠を1つ以上挙げて説明できた」児童は、56%であった。	3	2	自力解決等の場面で、「比較」など思考させる活動を意図的に仕組み、根拠をもたせる。	□「根拠を1つ以上挙げて説明できた児童」は、70%であった。 ◎既習と本時の内容や友達と自分の考えを比較するなどの活動を通して自分の考えを表現できる児童は増えた。	3	2	3	問題解決学習を行うことを通して集団解決の場面を工夫し、自分の考えを説明できる児童を増やしていく。
2	主体性の育成		継続	主体的にあいさつができる児童	あいさつの良さを実感できるあいさつキャンペーンを毎月1回行う。	あいさつ委員会によるあいさつ運動で、あいさつ名人を90%以上にする。	あいさつキャンペーンでのあいさつ名人94%	3	4	すすんであいさつをする児童をその場でほめるとともに、クラスで紹介する。さらに、地域の人に対して積極的にあいさつができるように指導する。	□あいさつキャンペーンでのあいさつ名人92%(評価指標に対する到達度は、102%) ◎校内においては、自分から先にあいさつができる児童が増えた。	4	4	4	さらに、地域の方への感謝のあいさつや、お客様へのあいさつが積極的に行えるようにしていく。
				新規	人のために進んで動く児童	毎月1回以上、縦割り班活動を仕組み、学級や学校のために活動する場を設ける。	振り返りカードで、自分の行動を見つめる時間を設け、全国学力・学習状況調査で「人が困っている時は進んで助ける」と回答する児童を90%以上にする。	「学校行事や縦割り班そうじで、みんなと協力してがんばった」と回答した児童94% 「人が困っている時は進んで助ける」と回答した児童が93%	4	4	縦割り班そうじや児童会行事を通して、学校のために役立っているという自尊感情を高める。	□「学校行事や縦割り班そうじで、みんなと協力してがんばった」と回答した児童95%(評価指標に対する到達度は、105%) ◎朝掃除をする高学年や無言掃除をする児童が増え、人のために動く児童の姿が多く見られた。	4	4	4
2	たくましく生きる		継続	体力づくりに主体	毎月テーマを決め、家庭での体力づくり	新体力テストで県平均以上を45項目以上にす	新体力テストで69項目が県平均以上であった。(昨年度	4	4	握力、ソフトボール投げを重点課題に設定し、家庭学	□再測定の結果、新たに4項目が県平均以上となり、計73項目が県平均	5	5	5	毎月の重点項目を継続し、さらなる

	体力の向上			的に取組む児童	の課題に取り組む。	る。	平均と比較)			習や委員会で取組む。	以上となった。 ◎多くの児童が主体的に体力づくりに取り組んでいる。学級レク等の充実を図り、指導を継続していく。				体力の向上を図る。
2	授業力の向上	★	見直し	授業づくりについて主体的に研修する教職員	授業者は模擬授業を実施し、授業観察者は視点に沿って評価する。	一斉研修での学びが授業改善に役立ったと感じている教職員が70%以上にする。	授業改善に役立っていると感じている教職員は、100%であった。	4	4	めあてとまとめの整合性など、授業力の向上に向けた研修を継続していく。	□授業改善に役立っていると感じている教職員は、100%であった。 ◎模擬授業等において、意見を交流するなどして主体的に研修に取り組むことができた。今後も、継続して取組む。	4	4	4	主体的な学習が展開されるよう、授業力向上に向けた研修を行っている。
2	地域貢献できる児童の育成		継続	地域のことを考え、主体的に行動できる児童	地域の人とのつながりを意識した活動に年2回以上行う。	学年で年1回以上、個人で年1回以上地域とのつながりを意識した活動を行う。	6学年中4学年が活動できている。また、個人では、86%の児童が活動できている。	4	3	参加した児童の声を取り上げるなどして、地域行事の様子を伝えて参加を呼びかける。残りの学年についても、地域と関わった活動を計画している。	□6学年中、4学年が活動できた。残りの2学年は、3月に実施予定である。また、個人では88%の児童が活動できた。 ◎学校内では地域とつながった活動を行った。個人においては、一度も地域行事等に参加していない児童がいる。	4	4	4	地域とつながった活動内容を工夫・充実させ、地域に関わる意識を高めている。

[プロセス評価の評価基準]		[達成評価の評価基準]		[総合評価の評価基準]	
評点	評価基準	評点	評価基準	評点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度 十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度 概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度 ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度 あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度 目標を達成できなかった。